
Song to give you

右翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Song to give you

【ZPDF】

Z2845F

【作者名】

右翼

【あらすじ】

音の無い唄を君に届けたい。音が無い分、気持ちだけは沢山詰まつてゐる唄を…更新不定期です…

#0 プロローグ（前書き）

誤字脱字など、教えてくださいれば嬉しいです。

#0 プロローグ

君を見ていると、腹が立つ。

どうしてそんなに自己中で、周りを見ないで突っ走るんだ。

君と話すと、話が続かない。

ほとんど無口で、話したと思えば一言や一言だけ。

君を想うと、胸が苦しくなる。

俺の中じゃどうでもいい存在なのに、どうしてこんなに苦しいんだ。

君が居ないと、探してしまつ。

正直、居なくともいいのに、君の身を案じてしまつ...

君の第一印象は最悪だった。

睨むし、無口だし、偉そつだし...

でも、君をもつと知りたいと思った俺がいた。
変かな？

でもさ、これだけは言いたい…

君を
…

俺は
…

ああ…凄く眠い…

寝たの何時だつけ…

2時？3時？

…覚えてないや。

とにかく、遅くに寝たのは確かだ。

唄を書くのに集中して、寝る時間なんか忘れていた。

唄つて言つても、短い詩みたいなものだ。

それをいくつか繋げて唄にする。

メロディーなんて無い。

その時の気分や、思いをただひたすら書き綴る。

それを中学から続けて、今じゃノート10冊溜まっている。

「あ…遅刻する…」

そうだった…

今日から俺は高3だつた…

まだ卒業じゃなかつたんだ…

早く支度しなきや。

キツネ色に焼けたパンを頬張りつつ、温かいココアを飲む。

これが、俺の朝の始まりを合図する。

どんなに急いでいても、遅刻しそうでも、これだけは欠かせない。

その結果…

「優斗… また遅刻か…」
「す、すいません」
「毎度毎度… まあ困るのよお前だがな。早く席に着け」

「はい…」

やつぱり遅刻か…
参ったな…
もつと早く朝飯食べればよかつた。
朝飯を抜けば… いや、駄目だ… 朝飯は俺の朝の始まりを教えてくれる役目が

「優斗、ぶつぶつ煩いぞ」

「す、すいません…」

『へすへすへす…』

畜生…

「今日は新しい転校生を紹介する。入つてこい」

「今頃？」

「女か！？美人がいいなあ」

「イケメンかなつ？」

今頃転校生か。

もうそろそろ卒業だぞ？
まあ、どうでもいいか。
ふああ…眠い…

「親御さんの急な転勤で、今日からここに来る」とになつた佐倉羽美だ。ほら、自己紹介して」

「…羽美。よろしく」

「可愛い…」

「シンデレキキャラだな！？ああ…シンデレラ…」

シンデレラってなんだよ。

「ひつ」

女子なんか舌打ちしてるし……

何か、暗い子だなあ。

まあ、いいか。

眠いし、関係無い関係無い……

ん?

何かこっち見て……いや、あれは……睨んでる……?

俺、何か悪いことしたか!?

何もしてない筈だ。

そう、俺はただ座つてただけだ。

何も言つてないし、睨んでもいいない。

じゃあ何であるの子は俺を睨んでるんだーつ!

「おつ!/?優斗、早速目を付けたなあ?」この一

おい担任……あんたは何を言つてるんだ。
睨まれてんのが解らんのか。

「おい、優斗の隣を空けてやれー」

「ちよつ……」

「優斗、羽美の教科書まだ来てないからお前が見せてやれー」

「まつ……」

「以上ー授業に遅れんなよー」

「……」

マジかよ……

何で俺が、この子に……

「ううう……まだ睨んでるよー。」

「つ、次は化学だから、ま、場所わかるよね……？」

「……」

反応無しかよ

辛い……

かといつて俺に友達なんて居ないから、頼れないしなあ。
しょ、しょうがない。

「い、い……一緒にいくつか

「……」

お願いだから何か喋つてーつ。

教室までが長く感じる…

「あら、あなたが新しい生徒ね？私は化学の教師の美麗つて書いたの。
ようしきね」

「……」

先生にも反応無しかよ。

「つぶなのねつ。可愛いわあ……」

おい…

あんたの捉え方はおかしい。

それにしても、本当に無口だな。
喋れないって訳じやないしな。

朝少し喋ったし。

何か、他人と関わるのを避けてるみたいにも見えるな。
まあいいか。

「さて、今日は薬品Bと薬品Dを混ぜて、温めてみます。瓶を並べ
ループを作つてやつてみてくださいーー」

…やつぱつこいつなるのか。

他は4人グループとかなのに、何故俺だけこの子とだけなんだ…
しうがないか。

で、薬品Bがこれで、薬品Dがこれ… フラスコに入れて温めると…

ボンッ…!!

「こつー?」

「…」

「あの子のフラスコが…ば、爆発した…

「あー… 羽美ちゃん、ちゃんとDとCを混ぜた?」

「…?」

これは、薬品Xと…X!?

どうからてきたんだ?

薬品Xなんてこの学校にあったか!?

この子は何なんだあ…

「羽美ちゃんたらあ。ふふふ…気に入つたわ

」

感想など、待っています

化学の授業での一件の後、あの子は美麗先生に気に入られたようだ。
数学の授業も放り出して、美麗先生と話をしている。
まあ、相変わらず無口で少し反応するだけみたいだがな。

やつと昼か。

この時間じゃもう売店は長蛇の列だな。
はあ…今日も珈琲牛乳だけか。

屋上行こうと

鍵が掛かってるから、ここをこいつして…あれ?
開いてる。

まさか先客?

いや、それは無い。

だつてここは俺だけの場所だ。

鍵だつて、元々掛かってた鍵を俺がちょっと弄つた鍵だから、開けるのは俺にしか出来ないはずだ。

鍵…締め忘れたかな…

「いっー!?

あれは…転校生!?
な、ななな何で!?

しかも飯食つてるし！

しょうがない……教室で食べるか

つて、ここは俺の場所なんだけど……」

1

シカトかよ…

卷之三

「あのーーーこーは俺の場所なーーー」

— 1 —

ふう…離れて食べよう。

「チユーチユー」

11

「チュー・チュー」

「…」

「チューチ」

「ちつ…」

舌打ちされた…

ても…何で転校生は鍵を開けることができたんだ?
こう言つちゃなんだが、鍵をいじらせるとピカ一なんだけどな。
それを壊さないで開けるなんて…
聞いてみよっかな。

「あの…」

「…」

「鍵…どうやって開けたの?」

「…捻つた」

「さいですか…」

捻つて開くわけがなかろうに…

ムキーツ!

腹立つなあ!

「貴方が造つたの？」

「ま、 まお…」

ふう
甘いね

ふつ…甘いね、どう!?

116

俺より凄い鍛造工でみるうてんだ。
そうしたら、認めてやう。

11

h?

これは、鍵？

では
これは鎌
？

それが俺の足と一センチは

五
二
六
又
上

何なんだよこれ！

新二の空

得意なら直ぐ解けるでしょう

「まつ……」

「……昼休み終わる……」

行つちまつた……
こ、こんな物つ

カーッ……カーッ……

ああ……カラスが鳴いてる。
いいなあカラスは。
自由に空を飛べて……

「まだ……居たの……？」

「……」

この女……

「…解けないの？」

「ふ、ふん！お前が来たら解けたんだー！こんなもん俺に掛か
れば…」

駄目でした…

何だよこの鍵穴は。
複雑過ぎて頭が痛くなる。
こりゃ俺には無理だ…

「はあ…はい」

この女…鍵を捻つたぞ？
おう？

…外れた…

「じゅ」

クソ…

鍵穴はダミーか。

鍵穴が複雑だつたからそつちに氣を取られてた。

悔しい。

転校生は帰つちまつたし、俺も帰るつ。
何かどつと疲れた

「ただいまー」

…つて誰もいるわけないか。

「母さん、親父。今日変な転校生がきたんだ。無口でさ、俺に取る態度が何かムカつくんだよね。考えすぎだと思つけど。はあ…疲れた。風呂入つて寝るよ」

俺に微笑みかけてくれる母さんと親父に一寸の出来事を話して、風呂の準備をした。

俺には、親が居ない。

俺がまだ小さい時に母さんが病氣で死んで、小学に上がつた時に親父が事故で死んだ。

その為に、親の愛情を知らない。

母さんに関しちゃ、ろくに顔もわからない。

[写真の母さんは若くて綺麗だから、たぶん俺が産まれる前のだろう。]

親父は、この前までは嫌いだった。

小さい頃の記憶では、親父は父と呼べる程の人じゃなかった。

仕事から帰ってきては酒を飲み、無くなると俺に怒鳴る。

俺にとつての親父は、ただの恐怖だった。

親戚に引き取られ、小中までは面倒見てもうつて感謝している。

俺の親同然だつたけど…

亡くなつてしまつた。

もう爺ちゃん婆ちゃんだつたから、しょうがないけど…

そう…親父は嫌いな存在“だつた”んだ。

俺が高校に入学する時までは…

『優斗…お前、高校はどうするんだ?入学金とかいろいろ必要だろ
…ひ…』

『大丈夫っす。何とかなりますから』

『でもな、お前の担任としては…』

『じゃあ、帰りますから』

『おーー。』

『婆ちゃん爺ちゃん、俺バイトしながら高校通つよ。めんね。—
人の保険金、使えなによ。』

『郵便でーす』

『ん?』

『判子お願いします』

『はい』

『あいつしたー』

『これは?お、親父からー?まさか?手紙?』

『これは俺からの誕生日プレゼントだ。』

『そつか…今日俺の…』

『家じや上手く渡せないからな。俺の居ないところで開けるよ。—
そして、俺に何にも言つな!』

』
』

最後に…こんな親父ですまんな…お前が大人になるまで我慢してくれ…二十歳になつたら一緒に酒でも呑もつや。

『馬鹿野郎…本つ當に馬鹿野郎…二十歳まで待つてろよ…死ぬの早すぎだらう…クソ…』

中には、親父の通帳が入つていた。
コツコツ稼いできた全財産。
それで俺は今の高校に入れた。

ふう
…

風呂つていろいろ考えちまうな。

明日は遅刻しないように早く上がつて寝よつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845f/>

Song to give you

2010年10月13日17時25分発行